

令和8年度の研修が本格的にスタート

4月に集中的に実施した林野庁の新採用職員を対象とした研修が終了し、いよいよ研修を本格的に実施する時期がやってきました。

今号では5月以降に本所、機械化センターで実施した研修及び今後募集を開始する研修をピックアップして紹介します。

研修所（本所）
研修紹介新たな技術と現場実践を学ぶ——基礎知識から林業DXまで
森林整備研修

■ 研修の背景・目的

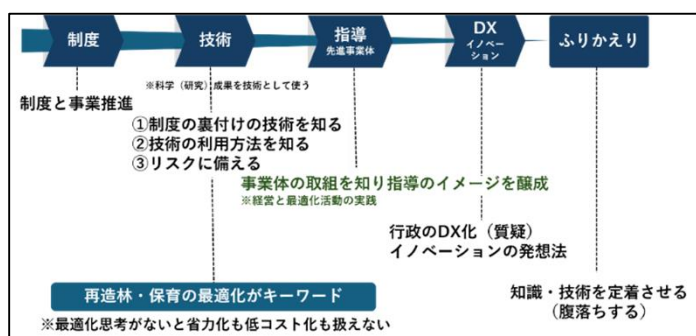
この研修は「地方公共団体職員、森林管理局・署等職員（初任者レベルの者）等」を対象とし、「森林整備事業等の効果的な推進を図るため、林業イノベーションの推進等による新たな取組、継続的に利用できる路網整備等についての知識及び技術を習得させ、森林整備事業等の適切な運用や林業事業体等に対する適切な指導ができる技術者を育成する」ことを目的に実施しました。

■ 研修内容

指導を行うには行政力と技術力を合わせた総合力と創造力が必要で、指導相手を理解し、適切に誘導することが肝要です。

まずはこのことを理解していただくため、ステップを可視化し、研修の最後にはそれぞれがレベルアップして欲しいことを開講時に伝えました。

カリキュラムは昨年までのカリキュラムを見直し、新たに獣害、樹病、林野火災、DXを追加するとともに下図のように「制度→技術→指導（先進林業事業体）→DX（イノベーション）→ふりかえり」というように区切りを付けながら学ぶように科目を配置しました。



1. 森林整備事業の概要

研修の冒頭では、制度と事業推進に必要な知識として、森林整備事業の概要から個別の事業の概要、路網、種苗まで制度の考え方、仕組み事業の進め方について学びました。

2. 林業イノベーションの推進等による新たな取組

続いて、「最適化」をキーワードにして「基礎とその技術の利用」について学びました。最適化には、伐採計画から造林・保育まで見通して考える「全体最適」と各作業における「個別最適」があり、その両方を意識しながら研修を進めるように配慮しました。

例えば、シカ等による獣害対策については、加害動物に応じた対策、地形等を勘案した合理的な防護資材の選択と維持・管理がポイントになり、造林作業においては「何故それをするのか」ということを知った上で、（省力化を含め）作業の組合せ、投入のタイミングを図りながら最適化し、結果として造林地の成林の可能性を高めるとともに、コスト低減を図ることがポイントになります。

また、リスクを知り危機管理を行う対応力を養うため、「樹病」、「林野火災」について学びました。

更に、林業のDX化について、実装のための準備段階、新システム導入又は手順変更の際に頻繁に発生する「生産性におけるパラドックス※1」、「DXの摩耗※2」といった課題や「技術と（規定等のルールを含め）手順を合わせること」がポイントになることを教務指導官から説明した後に、「森林整備事業における補助金のデジタル申請・検査ガイドライン」の内容について林野庁担当者から説明し、具体的に自分が何をすべきかイメージを持っていただきました。

その他、イノベーション理論について簡単に触れるとともに、昔（裸苗と鋤）と今（コンテナ苗と電動穴開け機）の植栽の違いと能率の違いを動画で2画面同時再生をして比較し、生産プロセスにおけるイノベーションを実感してもらいました。



3. 先進的な林業造林事業体の経営と取組

現地見学では、山梨県北杜市の有限会社天女山を訪問させていただきました。当日は雨天時々曇りという天候で当初予定したプログラムは実施できませんでしたが、実りある研修が実施できました。

はじめに、小宮山代表取締役様より企業を理解する上でポイントとなる企業理念、経営理念、事業方針、地域貢献の考えと方法、目標に向けた具体的な事業活動など幅広くお話いただきました。

森林施業については、林業DXが目指すのは全体最適と位置付け、改善の目の付け所、改善活動とその結果等について実例を掲げながら紹介していただきました。

特にドローン等を駆使した林分データの収集、GIS上のデータと地形特性等の情報等を紐づけ分析し、より高い精度で「適地適木」を実現させようという「根拠に基づく森林施業」の実践は、データ利用の具体例として研修生の理解を深めるのに役立ったのではないかと思います。

このほか、地域の木エクラフト作家（小規模需要者）向けに行う広葉樹市（販売）を行っていること、再造林地からの眺望を「将来見ることができなくなる景色」としてツーリズムに組み込む活動を行っていることなど、地域貢献・新価値創造の活動についてもお話いただきました。

座学の後には、室内でドローンカメラによる情報収集の仕組みの解説をしていただくとともに、施設の敷地内でコンテナ苗の電動式植栽穴あけ機の実演をしていただき、昔の植栽方法と改善された植栽方法の比較をしました。

その後、天気が若干回復したため、造林作業現場に移動して座学の中で紹介した作業技術の現地解説等をしていただきました。

■ 今後に向けて

本研修は「初任者レベルの者」を対象とした研修でしたが、研修生それぞれの経験も考えも異なる中で個人のレベルに応じた知識を付与することができるよう、基礎と応用を適度に取り入れました。

しかしながら、イノベーションの推進までは初任者にはハードルが高いと思われたことから、今後は、利用可能な技術の組合せ、投入のタイミングの調整等による最適化の考え方をよりわかりやすく理解できるように仕組みと教材を準備し、イノベーション推進のための足掛かりとしていきたいと考えています。

※1：PCやIT、生成AIなどの新しい技術や道具に多額のお金をかけても、全体の生産性や利益がすぐに上がらないという矛盾した現象のこと

※2：デジタル化や新しいITツールの導入・運用プロセスにおいて発生する「抵抗感」「業務・技術上の障害」「慣れるまでの不便感」など、円滑な変革を妨げる要因やストレスのこと

研修所（本所） 研修紹介

オンライン研修を追加し7日間の研修に拡充！ 路網（林道、森林作業道）計画研修【研修生募集中！】

■ 研修の背景・目的

本研修は、路網の線形計画を作成する技術の習得を目的としており、これまでは、次の流れで研修が実施されてきました。まず、線形計画に関する講義を受けた上で、600ha程度の壮齢級人工林を対象として、空中写真や森林簿（森林調査簿）データ等を参照しながら、5,000分の1の図面に林道及び森林作業道の線形を検討し描きます。次に、現地踏査を行って計画路線の妥当性を検証して修正を行い、成果品を仕上げます。これらはグループワークで行い、成果品を各班で発表し意見交換を行います。

令和8年度は、こうした内容を継承しつつも、ICTを活用する技術も研修科目に追加することとなりました。近年では、レーザ計測データで作成された微地形表現図や、路網設計支援ソフトが普及し始めてきており、また、災害リスクを考慮した森林のゾーニングの必要性も高まっていることから、これらを研修科目に加えることとしました。そのため、研修期間は、これまでの5日間から7日間に延長す

ることとし、追加した2日間はオンラインで実施することとしました。

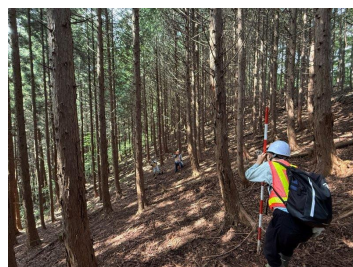
■ 研修概要

○対象：地方公共団体職員、森林管理局・署等職員
森林総合監理士等

○計画人員：25名

○日程：令和8年11月5日（木）～13日（金）
うち11月5日及び6日はオンライン研修

○実習：群馬県高崎市倉渕町の国有林（安中市内の宿泊施設を拠点とし2日間実施）



丈夫で使いやすい森林作業道づくりを学ぶ

新しい森林・林業基本計画においては、路網整備を推進するに当たり、林道と森林作業道を組み合わせた路網について、既存路網を活用しつつ、傾斜区分と作業システムに応じた目指すべき路網密度の水準を踏まえて整備を進めることとしています。

森林作業道は、森林所有者や林業事業者が、間伐等により生産された木材の集材及び搬出、主伐後の再造林等の森林整備等を行うために継続的に利用す

る道であり、主として、林業機械や2トン積程度のトラックの走行を想定しています。目標とする森林づくりのために、どのような森林施業を行うのかを見据え、安全な箇所に、作設費用を抑えつつ、繰返しの使用に耐えるよう丈夫に作設することが必要です。

今回は、林業機械化センターで実施している森林作業道関連2コースの研修を紹介します。

林業機械化センター 研修紹介

現地踏査の重要性を再確認！ 森林作業道（調査設計）研修

■ 研修内容

森林作業道の設計に当たっては、林道のように横断面、縦断面の作成や土量計算など行わないことがほとんどです。このため、設計に当たりよりどころとなるのは図面です。

しかしながら、現地には、図面では見えてこない水の流れや障害物などがたくさん存在します。最近ではCS立体図（尾根（凸地）、谷（凹地）等を色分けして表現された地図）なども活用できるため、以前に比べるとその存在が分かりやすくなっていますが、転石など判別できないものもあります。最終的には、現地をしっかりと踏査して、林内の状況を把握することが重要となります。

本研修では、まず、図面を頼りに森林作業道の線形を検討し、翌日以降の現地実習では、実際に林内を踏査し、図面からは読み取れない情報をしっかりと把握した上で、線形の再検討を行いました。

研修生からは、「自分たちで考えた作業道線形を

踏査して、考えることはとても勉強になった」「作業道の線形がなぜこの形になったのか意識しながら歩きたい」などの声もあり、現地踏査の重要性について理解が得られたと感じています。

■ 研修実施状況

○対象者：地方公共団体職員、森林管理局・署等職員等

○研修生：8名

○日程：令和8年7月6日(月)～10日(金)



図面を頼りに作業道の線形を決める



現地を踏査し、作設可能かどうかを検討

林業機械化センター 研修紹介

研修生が相互に教え合うことで指導力の向上を図る！ 森林作業道（作設指導）研修【研修生募集中！】

■ 研修内容

林野庁が策定した森林林業道作設指針では、森林作業道の作設に当たっては、同指針によるほか、地域において作業作設に十分な経験を有する者から技術的な指導を受けることが望ましいとされています。

本研修では、森林作業道の作設、維持管理の仕方を学ぶため、研修生が自ら機械を操作し作設を行います。その際、別の研修生が操作方法や作設手順等について指導を行います。お互いが学び合い、指導力の向上を目指します。

最終日には、森林総合研究所から講師を招いての講義のほか、普及指導についての課題解決に向けたディスカッションも行います。研修効果を高めるため、機械操作を経験していることが受講要件となっておりますが、多くの皆様に受講をご検討いただければ幸いです。

■ 研修概要

○対象者：地方公共団体職員、森林管理局・署等職員等

○計画人員：12名

○日程：令和8年11月9日(月)～13日(金)

○受講要件：

「小型車両系建設機械（整地・運搬・積込み用及び掘削用）の運転の業務に係る安全衛生特別教育（労働安全衛生規則第36条第9号）」修了者又は同程度の技能を有する者



安全で分かりやすい伝え方の検討



作設した作業道の評価・検討

■ 「知識」を伝えるだけで十分？

研修の場では、日々さまざまな知識や技術が伝えられています。森林林業に関する技術のみならず、法律、制度、手続、現場での判断基準。

いずれも業務を遂行するうえで欠かせない基礎であり、研修担当として丁寧に届けることを心がけているところです。ただ、近年、「知識を伝えるだけでは不十分なのではないか」と感じる場面が増えてきた印象もあります。

■ 「知識」と「知恵」のあいだにあるもの

知識とは、事実や手順として整理され伝達可能なものです。一方で、現場で求められるのは、状況に応じてその知識を適切に使い分ける「力」です。相手の立場を想像し、背景を読み取り、最適な判断を選び取る——その働きは、単なる知識ではなく、「知恵」と呼ぶべきものです。

そして、その知恵は、『正解を探す行為』とは異なります。むしろ、『問いを立て続ける姿勢』が知恵を育てる出発点になると感じます。

■ 正解のない仕事にどう向き合うか

研修の現場でも、受講生が「正解はどれですか？」と尋ねる場面は少なくありません。でも、行政の多くの仕事に、単純な正解は存在しません。地域の特性、住民の状況、制度の趣旨など、複数の要素を踏まえて判断する必要があります。

こうした点を踏まえると、研修の役割に、知識を提供するだけではなく、「どのような問いを立てれば、その状況にフィットし、理解できるか」という思考の枠組みを共有していく視点も含まれているのではないかと考えられます。

■ 知恵を育てる人間関係

また、知恵の形成には、人間関係も欠かせません。研修の開講時点では、受講生は周囲の人たちをまだ「ひとまとまりの集団」として見ています。それが時間の経過とともに、その場に安心感が生まれ、受講生同士の距離が縮まり、徐々に細かな「粒度」で捉えられるようになります。これは、知識が知恵へと変わるプロセスそのものです。人は信頼できる相手との対話（人間関係の中）でこそ、自分の考えを言語化し、問いを深め、理解を広げていけます。

■ 研修所は、知恵が育つ「土壌」

知恵は知識と異なり、教科書のように一方的に教え込むことはできません。経験、対話、内省を通してゆっくりと育っていきます。

研修所は、受講生が自ら問いを立て、知識を自分の文脈に引き寄せ、他者との関係性（人間関係形成）の中で意味づけを行いながら、知恵を育てていくための“土壌”を整える役割も大切にしています。

■ 知識が誰かのために使われるとき

公務員の仕事は、知識を積み上げるだけでは終わりません。その知識を誰かのために使おうとしたとき、初めて知恵が芽生えていきます。知識を渡すだけでなく、知恵が育つ場をつくる。それも研修所の大切な役割のひとつです。



編集後記

首席教務指導官 中熊 靖

時間が過ぎるのは早いもので、6月末時点で本年度の研修がスタートして3カ月が経過しました。その間、本所で16コース、機械化センターで4コースの計20コースの研修が実施されました。

昨年度は集中豪雨や台風による中止もなく、当初の計画どおり全ての研修を実施することができましたが、（深刻な事態には至らなかったものの）熱中症やダニの刺咬により欠席を余儀なくされた研修生もいらっしゃいました。

幸いなことに、今のところ本年度は、そのよう

なトラブルは発生しておりませんが、当研修所としては、これからも様々なリスクに十分注意しながら夏以降の後半戦の研修を実施していきたいと考えています。

このところ、八王子市や沼田市でも非常に暑い日が続いております。研修生の皆様もリスクへの備えを怠らず、万全の準備・体調で研修に臨んでいただければと思います。また、こまめな水分補給や十分な休養を心掛け、安全で実り多い研修期間となることを期待しております。

